

# かずさの博物誌

## 秋のアユ

～下流の岩盤で産卵～

文・写真／成田篤彦

2015.9.20



©成田篤彦



©成田篤彦

橋の上から川をのぞくと四つの十数匹の群れが、ゆらゆらと上流を向いて泳いでいた。

「魚の体長が十五センチ位なので、ボラの子の群れか?」と思つた。だが、スマートな体形だ。

双眼鏡で見ると背びれと尾びれの間に小さなひれが見えた。このひれはアユやサケなどの種類の特徴だ。この魚はアユ以外、考えられない。「市街地の近くの川で、親のアユが泳いでいるとは!」と驚いた。

ここ十年間、ほぼ毎月のようにこの場所を訪れているが、ここで親のアユの群れを見たのは初めてだ。

群れの先頭のアユは、大型で明黄色、それに体を寄せているアユは黒色で、いわゆる「さび（錆び）アユ」だ。先頭のアユが雌で、他のアユは雄か?と思つた。



文・写真／成田篤彦

2015.9.20

▲アユがすむ河川

2013年冬

▲アユの産卵

2011年晚秋の上総

橋の上から川をのぞくと四つの十数匹の群れが、ゆらゆらと上流を向いて泳いでいた。

「魚の体長が十五センチ位なので、ボラの子の群れか?」と思つた。だが、スマートな体形だ。

双眼鏡で見ると背びれと尾びれの間に小さなひれが見えた。このひれはアユやサケなどの種類の特徴だ。この魚はアユ以外、考えられない。「市街地の近くの川で、親のアユが泳いでいるとは!」と驚いた。

ここ十年間、ほぼ毎月のようにこの場所を訪れているが、ここで親のアユの群れを見たのは初めてだ。

群れの先頭のアユは、大型で明黄色、それに体を寄せているアユは黒色で、いわゆる「さび（錆び）アユ」だ。先頭のアユが雌で、他のアユは雄か?と思つた。

十数匹が塊になつてバシャ、バシャと水飛沫をあげた。

「産卵の瞬間を見るとは」と運の良さを喜んだ。

岩盤と流れ着いた枯れ竹に直径約1ミリの半透明なアユの卵が点々とついていた。

俳句集に「今まさに鮎（あゆ）産卵の波紋かな　楓　朝子」という句があつた。この句は作者が偶然に見た産卵の光景に感動して作ったのに違いない。

さて、五年前の初夏、数群の幼魚が東京湾からここに遡上してきた。十数年前までは、この河川に天然のアユが遡上し、下流で産卵しているとは思わなかつた。放流されたアユ遡上が見られる。

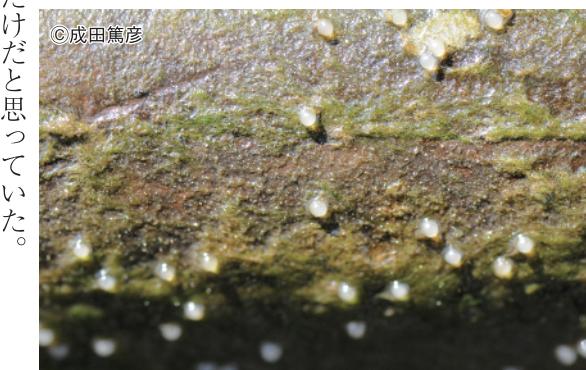
ところで、その後、この場所で産卵した様子はない。しかし、「きっと他の場所で産卵している」と思つてゐる。

アユは川魚では最も美味しく、淡水魚の王様とも言われている。

この河川でも天然のアユが絶えないよう、河川と稚魚が育つ内湾の環境を良好に保ちたいものだ。



▲晚秋のアユの群れ 2011年晚秋の上総



▲アユの卵 2011年晚秋の上総

参考文献

香魚、年魚とよばれる。寿命は一、二年。秋、川で生まれた稚アユは川を下り、冬季は内湾で過ごす。春、初夏に川をのぼり、主に中流域で生活する。海での稚アユのえさはプランクトンなどの小動物で、中流域にすむ若アユのそれは珪藻、藍藻である。春、秋には背側が青味がかつたオリーブ色、腹側は銀白色だが、秋の繁殖期のアユは「さびアユ」とよばれ、雌雄とも体色が黒ずむ。ただし、味は落ちる。

『図説俳句大歳時記夏』  
1979角川書店。『日本淡水魚』2001山と渓谷社